

《論文》

フィリピン人移住者にとっての教会の機能 —東京とシドニーの事例の比較から—

市川 誠

I はじめに

国内の雇用機会の不足と低賃金を背景に、近年多くのフィリピン人が移住者として出国するようになった。日本、オーストラリアをはじめ世界各地に職を求めて「出稼ぎ労働者」や「移民」などとして出国したフィリピン人は2006年に100万人を突破し、海外に滞在するフィリピン人は人口の1割以上といわれる¹。

日本のフィリピン人移住者についても様々な角度から研究がなされてきたが、そのなかで宗教に焦点をあてたものに、カトリック教会の果たす機能の多様性を明らかにしたマテオの研究²がある。東京の一小教区の教会を調査したマテオは、そこに通うフィリピン人にとって教会が宗教的な活動の場であるだけでなく、経済的、社会的、情緒的・心理的機能を果たすものであり、民族的な自助組織や共同体居留地を代替していると論じた。

本論文では、マテオの報告を参照しつつ、その事例と筆者の調査したシドニー（Sydney）のボーンアゲイン³の教会とを比較し共通点・相違点を検討することで、それぞれの事例の特徴やその要因を探り、そこからフィリピン人移住者のために宗教組織が果たす機能について普遍的な示唆の抽出を試みる⁴。ただし2つの教会は、宗教組織として宗派、規模、歴史などの諸条件が異なり、また教会のおかれた社会的条件も、言語や文化、ホスト国の移民受入政策などの面で大きく異なる。さらにどちらの事例も必ずしも当該国の代表的・典型的な教会とはいえない。こうしたことから本

論文での考察は予備的・仮説的なものにとどまらざるをえないが、諸条件の異なる複数の国の事例を取り上げることで、世界各地に移住するフィリピン人にとって宗教組織のもつ意味について、普遍性と多様性の両面への接近をめざしたい。

まず2つの事例を概観したうえで、両者の比較を通じてそれぞれの特徴を探り、その要因を考察していくことにする。

II 事例の概要

1. 東京のカトリック教会

マテオが調査した東京の巴町のカトリック教会は、東京大司教区に属するが、周囲に大使館などが多い立地から英語を話す信者のための特殊な小教区と位置づけられ、創立時からフランシスコ会修道士が司祭を勤めてきた。当初は外交官やビジネスエリートとその家族が主なメンバーで、出身国・地域も多様であったという。1990年前後の日本の好景気を背景に多数のフィリピン人が移住労働者として来日し、巴町の教会の礼拝でもその人数が増加したため、フランシスコ会はマニラからフィリピン人のフランシスコ会士を協力司祭として招聘した。この司祭を中心に、タガログ語による礼拝や、フィリピンの民族的な典礼が始められ、多くのフィリピン人がこれに参加するようになった。さらに宗教活動以外の領域でも、フィリピン人移住労働者の組織が設立され、雇用問題をはじめ生活上の問題への取り組みが開始された。取り組みは非合法の滞在者まで対象とし、医療機関や日比双方の弁護士と連携して進められた。こうしたことから、東京都内だけでなく近県のフィリピン人労働者が教会に通うようになり、自助的な活動に参加するようになった。

上記の展開の結果、フィリピン人は巴町教会の「傍流から主流」へと変わったが、それはもう一方で、教会内の非フィリピン人との間に緊張を生じさせた。非フィリピン人の信徒たちは、フィリピン人グループが「小教

区内の小教区」⁵と化していると考え、分離独立や民族教会設立を目指すのではないかと疑うようになったという。マテオの調査の時点では、フィリピン人の組織からも、イデオロギー的な対立から立場を異にするグループが分派していた。

2. シドニーのボーンアゲイン教会

カトリックでは教会行政上、小教区の教会がより上位の教区の一部と位置づけられ、教区の一定のコントロール下にあるのに対して、ボーンアゲインではそれぞれの教会の独立性が高く、もっぱら牧師を中心としたリーダーシップによって教会の設立や運営の方針が決定される。筆者が調査対象としたナンリー（Nanly）の教会は、2006年にフィリピンからオーストラリアに移住したクレイトン牧師が設立した。牧師はフィリピン人を主なメンバーとする教会を、ナンリーを含め3つ運営している。そのうちの1つは牧師の住むシドニー市西方内陸の郊外にあり、礼拝出席者の半数以上は牧師の親族で、「家族教会」の性格が強かった。残り2つの教会はシドニー市北海岸地区にあるが、このうち2013年の時点でより礼拝出席者数が多く、より安定した状態にあったとみられるナンリーの教会を調査対象とした。なお、現在3教会の運営はクレイトンのほか、彼の妹ともう一人のフィリピン人の計3名の牧師が共同で行っている。

ナンリーの教会では、毎週日曜の午前に礼拝を中心とする集会が行われ、午後にも研修や親睦の集会がもたれることが多い。また金曜の夜にも研修や親睦の集会が行われる。教会は自身の施設を保有しておらず、日曜午前の集会は時間借りのコミュニティー・センターを会場とし、それ以外の集会は主に信徒メンバーの家で行われていた。2013年の3月と9月に観察したときの礼拝出席者数は20～30人で、それ以外の集会は10～20人程度であった。出席者のほとんどはフィリピン人ないしフィリピン出身者であったが、若干名のオーストラリア人も出席しており、特にメンバーの配偶者1人を含む2人は、ほぼ全ての集会に出席していた。年齢は20～30

代が中心で20代の方が多かった。事実婚を含めて既婚者は2人そろって出席することもあり、独身者よりも既婚者の人数の方が多かった。メンバーの一部に質問票やインタビューで尋ねたところでは、そのすべての者が高等教育か中等後教育を修了ないし就学中で、半数弱の者の職業が看護師(nurse)であった。またすべての者が合法滞在者であった。なお、メンバーの中で特に3組のカップルが、牧師たちから積極的な参画を期待されており、礼拝や他のプログラムのなかでしばしば主要な役割を与えられていた。

Ⅲ 事例の比較

以下では、巴町の教会の事例に対するマテオの分析の枠組みをナンリーの教会の事例にあてはめつつ2つの教会を比較することで、両者の共通点と相違点を明らかにするとともに、その背景や要因について仮説的な考察を試みる。

1. 教会の非宗教的な機能

マテオは、巴町の教会がフィリピン人信徒に対し、霊的な面だけでなく現世的な面で役割を果たす2重構造となっていると指摘した。宗教活動以外の(世俗的な)機能としてマテオは、インフォーマルな職業仲介の仕組みに代表される経済的機能、友人・同胞との出会いの場としての社会的機能、「家庭を遠く離れているときの家庭」としての情緒的・心理的機能をあげている⁶。「日曜日の度に教会に集まることによって」フィリピン人たちは「同砲の友人たちとリラックスしあい、新しい友人を見つけ…お金の貸し借りや、同胞の移住労働者に働き口の情報を依頼」している。こうして教会はフィリピン人信徒たちを「元気づけ…共同体の団結・維持を支えるイカリとして機能」⁷しているという。

こうした多様な機能のゆえに、フィリピン人移住労働者にとってカトリック教会のもつ意味合いは、本国にいるときと渡航していると大きく

異なるという。本国ではさほど宗教を重要視せず、日曜のミサ出席という基本的な義務も果たしていなかった多くのフィリピン人が、国外では教会に通うようになり、「より宗教的」になるように見えるのは、彼らが「カトリック信仰を適応・生き残りの方策」としていることのあらわれであると、マテオは論じている。そして教会のこの多面的な機能がほとんどすべてのニーズに対応してきたことが、フィリピン人移住労働者のなかに自助団体や共同体居留地が形成されなかった理由ではないかと論じている。日曜の礼拝や平日の宗教行事に参集するフィリピン人が形成する集団をマテオは「折りたたみ椅子の共同体」と呼び、物理的な外見を常時保持してはおらず、その点で他の民族集団の居留地とは異なる形態ではあるが、そこがフィリピン人移住者間の主要な相互作用の場となってきたと指摘している⁸。

〈経済的機能〉

ナンリーの教会でも、これと同様に宗教活動以外の機能がみられた。しかしナンリーでは巴町の事例ほどに多様な機能を確認することはできず、特に経済的機能と位置づけられる活動はみることができなかった。巴町の教会では、求職中の者と求人情報がボランティアの教会メンバーのもとに集約され、合法・非合法滞在を問わず多くの者がこれを利用し、また情報提供を行ってきたという。このことが、教会の立地する地域だけでなく隣接近県からも多数のフィリピン人が教会に通う一因となり、また求人へのアクセスや教会からの推薦・保証を得ることが教会活動へ積極的に参加する動機の一つとなってきたという⁹。これに対してナンリーの教会では、こうした職業紹介の仕組みはみられなかった。その理由として考えられることの一つは、求人情報が十分に集約される人数規模に教会が達していないことである。しかしより重要な点として、メンバーの中にそうしたニーズがほとんどないということが考えられる。滞在資格が合法なこともあり、メンバーの雇用は安定しており、就学中の者には就職の見通しがあるようであった。また困窮時の支援が期待できる親族が近くにいる者もいた。こ

これは巴町の教会のメンバーではまれなことと思われる。こうした教会メンバーの相対的に安定した雇用状態から、巴町の教会のような職業紹介の仕組みは必要とされず、発展しなかったと考えられる¹⁰。ナンリーの教会のメンバーにみられたこうした雇用の安定は、移民をより選別的に受け入れ職業資格などの選抜基準を強化してきた近年のオーストラリアの政策に由来するものと思われる¹¹。日本とオーストラリアの移民政策の相違を背景とした、両国に在住するフィリピン人の雇用条件の差が、巴町とナンリーの教会の機能に反映されていたと考えられる。またこの他に、新規メンバーの勧誘が現メンバーの職場の同僚を対象に行われてきたことも、ナンリーの教会に雇用の安定しているメンバーが多かった一因と考えられる。

ただしナンリーの教会でこれからも経済的機能がみられる可能性がないとは断言できないと思われる。筆者の配布した質問紙では「緊急／困難時にだれに助けを求めるか」という質問も設けたが、9人中8人が「教会」や「牧師」「教会の仲間」と答えており、教会には経済面を含む支援の機能が期待されていると考えられる。将来仮に移民、雇用などの政策変更や経済の悪化といった社会的条件の変化が生じ多くのメンバーに深刻な影響を及ぼした場合には、なんらかの形の経済的な互助の仕組みが教会内に形成されることがあるかもしれない。

〈社会的・心理的機能〉

ナンリーの教会でみられた宗教活動以外の主な機能は、マテオの分類に従えば社会的機能や情緒的・心理的機能に位置づけられると思われる。マテオによると、フィリピンではカトリック教会は広場（タウン・センター）の前に立地しているのが一般的で、信徒たちは典礼の終了後に友人とのつきあいのためにそこにとどまるという。こうした習慣は、巴町やナンリーの教会でもみられた。ただし広いスペースのない巴町の教会では、フィリピン人たちは教会の前の駐車場に「うわさやおしゃべり、おつきあい」のために集まっていたという¹²。

日曜に公共施設を時間借りしているナンリーの教会では、礼拝など宗教

活動の行われる同じ空間で、その前後の時間に、食事と歓談が行われる。特に礼拝の直前の時間は「フェローシップ」と呼ばれ、毎日曜の教会活動の公式スケジュールに組み込まれていた。日曜のスケジュールの初めに、牧師夫妻や何人かのメンバーがパンやあらかじめ調理してきた料理を会場付設の厨房で温めてテーブルに並べ、出席者はセルフ・サービスでこれらをつまみながら歓談の時間をもつ。プログラム終了後にも同様な時間がとられる。カトリック教会の場合はフィリピンでも巴町でも非公式とされる礼拝前後の歓談・親睦が公式化されていることは、一つの特徴といえることができる。教会がその社会的・心理的機能を自覚し、重視しているのではないと思われる。

金曜の夜の信徒宅での集会のときも、最初に歓談と食事の時間がとられており、これも「公式」にスケジュールのなかに位置づけられているとみることができる。なお、この金曜の夜や日曜の午後の集会は、日曜の朝の礼拝よりも少人数で個人宅が会場であることなどから、文字通り「アット・ホーム」な雰囲気であり、メンバーたちはプログラムの全体をより「インフォーマル」なものとして受けとっているようにみえた¹³。

この他に、パーティーや野外レクリエーションが、おおむね1～2ヶ月に1度程度行われていた。直接観察する機会はなかったが、過去のレクリエーション時に撮影されたビデオが編集され礼拝後に上映されていた。また9月の礼拝のなかで、翌月のレクリエーションの予定がアナウンスされていた。こうしたビデオ上映やアナウンスは、公式な活動としての位置づけを示すと考えられる。ナンリーの教会では、巴町と比べて、社会的・心理的機能をはたす活動がより多くの割合を占め、より公式な教会活動として位置づけられていたといえることができる¹⁴。

なお、ナンリーの教会では、礼拝や牧師の講話、小グループでのメンバーの話し合いなどは英語で行われるが、フェローシップなどでは主にタガログ語が使われていた。社会的・心理的機能とその他との切り換えにともなって、使用言語も切り換えられているといえるかもしれない¹⁵。

2. 民族的な典礼

マテオによると、巴町の教会では、多数のフィリピン人が通うようになってから宗教的な活動にも変化がみられたという。その一つが、フィリピンの伝統的な宗教行事が行われるようになったことで、毎週金曜の絶えざる御援けの聖母へのノベナ、第一金曜夜の償いの深夜祈祷、戸別訪問、他地域への巡礼（秋田県の教会への年1回の巡礼）の4つがあげられている¹⁶。これらはカトリックの教義に沿った典礼で、日本の教会では一般的ではないが、フィリピンでは広く行われているという。巴町の教会では、多数のフィリピン人信徒が通うようになったことでこれらの典礼が始められた。母国でなじみのあるこうした宗教行事に参加することで、フィリピン人たちは「独自の民族性と宗教的アイデンティティ」¹⁷を確認していたとマテオは指摘している。

こうした「伝統の輸入」がみられる背景には、カトリックが土着の文化的嗜好や社会組織の形態に則してアレンジされた、いわゆる「フォーク・カトリシズム」がフィリピン社会に浸透していたことや、そうした地域ごとの信仰や実践の多様性を肯定的に受け入れてきたカトリック教会権威のインカルチュレーション（文化内開花）への態度、さらにはカトリック教会の多岐にわたる典礼の発展があったといえる¹⁸。

これに対し、ボーンアゲインであるナンリーの教会では、メンバーのほとんどがフィリピン人であるにもかかわらず、典礼に民族的な特徴はみられなかった。この民族性のなさの要因の一つは、おそらくは、フィリピンのボーンアゲインの教会の多くで、同様に民族的な特徴がないか、またはカトリックと比べて希薄なためではないかと推察される。メンバーのなかには渡航前からフィリピンでボーンアゲインの教会に通っていた者が少なくなく、インタビューの中で、フィリピンに通っていた教会とナンリーの教会とで様式に大きな違いはないと言う者がいた。カトリックのフィリピン人の場合、日本など移住先の教会では母国でなじんできたような民族的な典礼が当初は行われておらず、これを求める彼らの希望に現地の教会が

応えて民族的な典礼が導入されることがあるのに対し、なじんできた典礼に民族的な特徴が必ずしもないボーンアゲインのフィリピン人の場合は、移住先の教会でも典礼に違和感をもつことがなく、そのまま受け入れてきたのではないかと考えられる。ただしこのことを確認するためにはフィリピンとオーストラリアでより多くの教会を対象とした調査が必要であり、今後の課題とされる。

また典礼の民族性に関連して、巴町とナンリーの教会では、使用言語にも相違がみられた。すなわち巴町の教会では日本語、英語に加えてタガログ語による日曜の礼拝が月2回行われていたのに対し、ナンリーの教会の礼拝は英語のみであった。マテオは巴町の教会で、タガログ語のミサがフィリピン人移住労働者を元気づけ、「かれらを新しい環境に順応させる助け」¹⁹ となったと指摘している。ナンリーの教会でも、こうしたタガログ語の礼拝による効果は期待できるものと思われる。また先述のようにフェローシップなどではタガログ語が話されていた。しかし礼拝の式文や賛美歌などの典礼はすべて英語であり、牧師の講話や、小グループでのメンバーの話し合いも同様であった。

ナンリーの教会がこのように礼拝などでもっぱら英語を使用するのは、規模の拡大を志向しておりフィリピン人以外のメンバーの受け入れを視野に入れているためと思われる。実際のところ、フィリピン出身者の配偶者を含めてオーストラリア人の礼拝出席者がすでにいることから、英語の礼拝は必須であった。より人数規模の大きい教会であれば、週に複数回の礼拝を行いその中で英語とタガログ語による礼拝の両方を提供することが可能であるが、規模の小さいナンリーの教会では、礼拝は週1回に限られており、上記の理由からそれは英語で行われることになったとみられる²⁰。

ただしフィリピン人にとって、タガログ語による礼拝と英語による礼拝の間の隔たりは、日本語など他の外国語とタガログ語の間の隔たりほど大きくないと思われる。フィリピンでは英語は公用語として広く使用され、学校教育においても初等段階から理数科や英語科の教授用語となってお

り、高学歴層ほど英語を日常的に使用している。礼拝も、比較的裕福な層の多く住む地域の教会では、タガログ語などその地域の母語に加えて英語でも行われている。ナンリーの教会メンバーは、おおむね中等後教育か高等教育を受けた高学歴層であり、英語社会オーストラリアにすでに一定年数居住していることから、彼らにとってのタガログ語と英語の礼拝の間の隔たりは、日本の巴町教会のフィリピン人にとっての隔たりよりも小さいのではないかと思われる。

3. 教会内でのフィリピン人の地位向上と内部の対立

マテオによると、巴町教会のフィリピン人たちは、上記の民族的な典礼などを通じ自身の尊厳を回復していった一方、彼らの人数規模が相対的に増加し教会内での地位が向上していくことで、民族的な緊張が教会内で生じるようになったという。巴町教会のフィリピン人の多くは、母国では中間層に属し専門職の地位にありながら、その学歴や経歴と比べて「より低い」ブルーカラー職などに従事せざるを得ず、また不安定な法的地位や限定的な市民権しか付与されないことで社会的な疎外感を抱いてきた。こうした者たちが、母国の民族的な宗教伝統を通じ「宗教的アイデンティティを鮮明にしていくなかで…失われてしまった自分を取り戻し…自己の尊厳を回復」²¹ することができたというマテオは指摘している。しかし、フィリピン人の教会内での地位の上昇は、他の民族メンバーの下降を意味し、両者の間に摩擦を生むことになった。旧来の教会メンバーの多くが英語の礼拝に出席する外交官や外国人ビジネス・エリートなど上層階級出身者で、フィリピン人移住労働者とは雇用者・被雇用者の関係にあったことが、緊張にさらに拍車をかけたという。フィリピン人移民の尊厳の回復と、これと表裏の関係にある他のメンバーの下降とは、「神の家」である教会では「すべての人間が平等であるという建前」²² のもとで実現したということができる。その結果、教会内に摩擦が生じたことは、逆説的といえよう。

ナンリーの事例では、こうした教会内部の緊張や対立は見られなかった。

その主な理由は、巴町の教会と比べてメンバー構成が民族的・階層的により均一なことにあったと思われる。ナンリーの教会は、これまでのところ、ほとんどのメンバーがフィリピン人である。出身階層も、先述のように新規メンバーの勧誘が現メンバーの個人的ネットワークによることから、より均一的であった。このため内部に小グループの形成を促すほどの差異がメンバーの中になかった。一方、カトリックではこれと対照的に、信徒は民族や出身階層によらずその居住地を管轄する教会に原則として通うことになっているため、メンバー構成が多様化する傾向があり、内部はグループ化されやすく、その構成の変動によって摩擦が生ずる可能性がより高いと考えられる。このことから、巴町の教会でみられた民族的・階層的な緊張は、カトリックという教派に固有なメンバー構成様式を一因としているということが出来る。

またこれに加え、ナンリーの教会メンバーたちのホスト社会オーストラリアでの地位が、先述の巴町の教会の者たちと比べて低くないことも見落とせない点と思われる。ナンリーのメンバーのなかには看護師として働いている者が少なくなかったが、彼らは高等教育段階でそのための課程を修めており、文字通り「学歴にふさわしい職業」に従事しているということが出来る。これは上述のように巴町の教会のフィリピン人が職業の下方移動を経験していたのと大きく異なる。またナンリーの教会のフィリピン人の滞在資格は合法で、永住権をもつ者も少なくなく、巴町の教会のフィリピン人と比べてより完全な市民権を享受しているとみられる。こうしたことから、ナンリーの教会のフィリピン人は、巴町の教会の者ほどには「尊厳の回復」を求めていなかったのではないかと思われる。こうした相違は日豪の移民受入政策ならびにその結果としての移住労働者のおかれた状況の違いに由来しており、おそらくは、両国の他の教会のフィリピン人にも広くあてはまるのではないかと推察されるが、その確認のためにも、一層の事例調査の蓄積をはじめとするより総合的な研究が必要となる。

IV おわりに

これまでみてきたように、2つの事例の教会はどちらも、フィリピン人移住者のために宗教以外に社会的・心理的機能も果たしており、そうした場でタガログ語が使用される点で共通していた。こうしたことは、フィリピン人移住者の通う教会では、日本やオーストラリアに限らず他の多くの国や地域で広くみられるのではないかと推察される。その一方で、巴町の教会ではフィリピン人の間で経済的機能（組織的な職業紹介）が活発であり、またタガログ語による礼拝と民族的典礼が行われ、それらを通じて移住労働者メンバーの地位が向上する一方、民族的緊張も生じたのに対し、ナンリーの教会ではそれらがみられず、こうした点で両者の間には相違もあった。

上で考察したこれらの相違の要因には、事例に個別的な特徴と、より普遍的な、教派やホスト社会の特徴や相違があると考えられる。ナンリーの教会がまだ設立したばかりで規模が小さく、新メンバー受け入れに積極的なことや、メンバーに職場の同僚や親族関係の者が多く構成が均一なことなどは、事例に個別的な特徴と考えられる。一方、教派に固有な要因としては、信徒が居住地区（小教区）の教会に通うカトリックの場合にメンバーが多様化する傾向があることや、フィリピン・カトリック教会での民族的典礼の普及があげられる。また各ホスト社会に固有な要因としては、日本へのフィリピン人移住者たちが地位の下方移動を経験することや、その雇用が不安定なことがあげられる。オーストラリアへの移住者の場合はそうした経験が少なく、移住者の出身階層も相対的に高いといわれる。この他に、日豪の言語状況の差、すわなちフィリピン人高学歴層が自由に使用できる英語がオーストラリアでは公用語であることも、ホスト社会に固有な要因といえることができる。

これらの普遍的な要因に由来するとみられる特徴は、個別の事例にとどまらず、その教派ないしホスト社会の教会の全般的な傾向を示しているの

ではないかと推察される。ただし既述のとおり、限られた2つの事例のみの分析にもとづくここでの考察は、予備的・仮説的な段階にとどまっている。その検証には、より一層の事例研究の蓄積と、それぞれのホスト社会と教派の多面的な分析が求められる。今後の課題としたい。

注

- 1 鈴木有理佳「フィリピン」アジア経済研究所『アジア動向年報 2006』2006年、p. 315.
- 2 マテオ、イバーラ・C（北村正之訳）『「滞日」互助網－折りたたみ椅子の共同体』フリープレス、2003年。
- 3 ボーン・アゲイン・クリスチャンは「生まれ代わった・宗教的に再生したキリスト教徒」を意味する。アメリカ・プロテスタントの福音派（エバンジェリカル）から展開されるようになった運動で、クリスチャンの家庭に生まれ育ったというだけでなく、宗教的自覚や回心体験などによって真のキリスト教徒としての確信を抱かなければならないとする。個人的な宗教体験を重視し、信仰と生活の唯一の基盤として聖書と伝道が強調されるという。（『キリスト教を知る事典』教文館、1996年、p. 309.）
- 4 マテオによる東京での調査は1995年に6ヶ月間行われた。筆者のシドニーでの調査期間は、2013年3月22日～31日と9月5日～23日であった。なお調査地名と人名は、マテオの研究の参照部分を含め全て仮名である。
- 5 マテオ、pp. 82, 219-223.
- 6 マテオのあげていない教育的機能に焦点をあてた事例研究もある。（三浦綾希子「フィリピン系エスニック教会の教育的役割－世代によるニーズの差異に注目して－『教育社会学研究』第90集、2012年、pp.191-211）これはフィリピン系2世や1.5世を対象とする東京の教会の日曜学校やユース・グループの機能である。この教会の教派は「プロテスタント」とのみ記されているが、描写されている礼拝の様子は筆者が日本やオーストラリア、フィリピンでみてきたボーン・アゲインの教会に近い。マテオが見落としたのではなく、実際

に巴町の教会でフィリピン人に対するこうした教育的機能がなかったとすると、その理由はおそらくは、巴町の教会のフィリピン人メンバーに子どもの帯同者が少なかったことにあるとみられる。また日本のカトリック教会全般では、日曜学校が民族ないし言語別に構成され得るか否かが一つの焦点と思われる。対照的に、上記の事例の教会のユース・グループは、フィリピンの同教派の教会の慣行が日本に持ち込まれたものと記されており、教派の伝統・特徴に注目する必要があると思われる。ナンリーの場合は、当該世代のメンバーがまだきわめて少ないため、当面は教育的機能はみられないと予想される。教育的機能の比較検討は、今後の課題としたい。

- 7 マテオ, pp. 44, 69, 238.
- 8 マテオ, p. 237.
- 9 マテオ, p. 168.
- 10 ただしナンリーの教会内でも、職業斡旋とみなすことができるケースが1件みられた。これは教会メンバーの一人が開始した清掃業で、人員を教会メンバーから確保していた。しかし不定期の求人すぎず、これ以外のケースはみられなかった。このケースから、ナンリーの教会のもつ宗教以外の機能の多様性がうかがわれるが、その一方で、巴町の教会のように経済的機能が教会活動への参加の動機づけとなるまでの発展はしてはいなかった。
- 11 オーストラリアの移民受入政策や多文化主義の近年の変容については、次を参照。関根政美「オーストラリア多文化主義の歴史的発展とその変容」石井由香他『アジア系専門職移民の現在－変容するマルチカルチュラル・オーストラリア』慶応義塾大学出版会, 2009年。
- 12 マテオ, p. 148.
- 13 筆者が観察した9月の日曜午後の信徒宅での集会のときは、公共施設と異なり時間借りでないためか、その場でより長い時間をかけて料理が行われ、その間もインフォーマルな歓談が行われた。この日は料理に時間が長くかかりすぎたため、予定されていたプログラムのうち最も公式と思われる勉強会の部分が延期され、近隣の海岸への散策が優先された。

- 14 頻度は低いが、巴町でも教会プログラムの一部となっている懇親活動があった。例えば第1金曜のノベナ後に懇親会がもたれ、「アガペ」と呼ばれていた。(マテオ, p. 195)
- 15 ただしフェローシップなどの際も、タガログ語のなかに英語が交じるコード・スイッチングがみられた。またオーストラリア人のいる場では全員が英語で話していた。
- 16 最初の2つは教会の聖堂で行われる信心業である。戸別訪問は、信徒がマリアの聖像とともに町内を行列し、一軒の家で像をあがめるフィリピンの祭儀をアレンジしたもので、行列の部分を省略して家庭を直接訪問していた。(マテオ, p. 205)
- 17 マテオ, p. 228.
- 18 フォーク・カトリシズムについては、次を参照。リンチ、フランク「フィリピンのフォーク・カトリシズム」ホルンスタイナー、メアリー・R (山本まつよ訳)『フィリピンのこころ』めこん、1977年。
- 19 マテオ, p. 238.
- 20 フィリピン人も多く通う日本のボーンアゲインの教会の一つで筆者が観察したところでは、日曜の礼拝が2回、それぞれ英語と日本語で別に行われる他、金曜夜の祈祷集会では、メンバーが同時通訳を行い、英語と日本語の両方で行われていた。
- 21 マテオ, p. 231.
- 22 マテオ, p. 219.

[付記] 本稿は「環太平洋地域における移住者コミュニティの動態の比較研究—近年の変遷に注目して」(2011年度～2014年度科研費補助金(基盤研究A)、研究代表者・栗田和明・立教大学教授)の成果の一部である。

(本学教員、JICE 所員)